

大好きなお母さんへ

仲川 浩世（奈良県天理市・四十四歳）

お母さん、あなたがいなくなってから一年半が過ぎました。

お母さんがこの世からいなくなって、心の底から笑うということができなくなりました。それでも、お父さんはもっと辛いのだということが最近になってやっとわかりました。遅すぎますね。その上お父さんに優しくもできず最低です。今の私をお母さんが見たら軽蔑するか、悲しむでしょう。一体どうしたらいいのか、わかりません。どうして、こんな嫌な性格になってしまったのだろう、いつもそればかり考えて、器用に生きられない自分のことを齒がゆく思います。

いつも、風を感じて、青空を見上げて、星を見ればお母さんが何を考えているのか分かります。たぶん他の人がこのことを聞けば頭がおかしいのかと思うかもしれませんがお母さんが喜んでくれている時、ちよっと機嫌が悪い時など全て理解できます。

街の中で、母親と小さな女の子の姿を見ると昔の自分のことのような気がします。小さい時いつもお母さんのことを思って、お母さんが大好きで、一緒にいたいとそればかり考えていました。

お母さんのおにぎり、卵焼き、もう一生食べられないのかと思うと涙があふれます。これを書きながら、泣かないと決めたのにまた泣いています。身体の弱かった私がたくさんご飯を食べるようになっておにぎりを作ってくれていた子供時代のことを忘れることはできません。

何のためにこれを書いているのか、自分を責めるためなのかはわかりません。もっと私が気遣いのできる人間でいたらお母さんを死なせずに済んだのだに思うとずっと自分のことを許せないでいます。

私はお母さんと同じ教師なのに、お母さんのような人格者ではありません。本当に欠陥だらけの人間です。こんな私がよく教師でいられるなあと思います。いつもありのままの人間でいたい、お母さんが教えてくれたように自分の心を偽りたくはないと思います。だから、お母さん、私は自分で頑張ることができから、お父さんを支えてあげてください。お願いします。姿は見えなくても、お父さんのことを守ってください。今日夢で会えますように。お休みなさい。